



TITLE:

感想4(東京夏の学校に参加して)

AUTHOR(S):

和田, 靖

---

CITATION:

和田, 靖. 感想4(東京夏の学校に参加して). 物性研究 1966, 5(5): 359-359

ISSUE DATE:

1966-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85851>

RIGHT:

感 想 3

森 田 章 (東北大理)

1. この Summer School に出席してみて、私としては多くの点で再教育され、有益であつた。Summer School開催までの関係者の努力に感謝したい。
1. 講義に対する discussion が若干低調であつた様に思う。これは語学のハンディキャップもあつたとは思ふが、日本人の閉鎖的傾向が多分に影響している様に思う。この点も今回の summer school の様な試みを積み重ねてゆくことに改善されると思う。
1. 印象として何となく時間がこみすぎている感じがする。講義の反響と、議論及び遊び等のための時間が不足であつた。又講義と講義との間には 20 ~ 30 分程度の休憩が望ましい。
1. 記憶の新鮮なうちに講義録が読める様に講義録を出来るだけ早く出版して欲しい。正式の印刷が遅れる場合には、後で本印刷を買うことを条件に仮印刷 or コピーを希望者に配布する様な方法を出来れば講じてほしい。
1. 講義内容は大体あの程度でよかつた様に思う。然しものによつては (例えば Schriffer と Pines の講義) もう少し elementary な部分から始めた方が良くと思う。

感 想 4

和 田 靖 (東大理)

まず予想と違つていたのは summer school というよりも invited talks に強い重点をおいた学会の様に感じたこと、出席者は研究者が主体で PH.D. 前後の人達が少なかつたことでした。このことが悪かつたという意味ではありませんが、将来 “school” であることに重点をおきたいとお考えでしたら、話のしかたも “invited talks” 式よりももつと lecture 的にした方が良いでしょうし、出席者の数、種類についても、もう少し限定されても良いのではないかと思います。無論、今年の様に幾分、学会的な会にも、大きな意義はある訳で、その形式を続けられることも一つのやり方だとも思っています。